

(1)

筑後川の中流、浮羽町での尾花成春は名士だ。第一に数式に詳しいマイクロウェーブの技師である。名門の出ながら、かつてはセザンヌ風な絵を描く自由美術の芸術家であった。それにもまして、今秋のお米の収穫の話のケリをつける芸術風な問いとイタヅラッポイ眼鏡越しの彼のイチベツが純朴でこずるい主婦達のナニカを刺激したからかも知れない。

田舎紳士が田舎紳士でなくなるカラクリは知らないが、それ、個人に寄せられる好奇心の巨大なエネルギーには、だれしも不思議な思いを持っているだろうが、田舎はこれまた特別である。そのヒドイ蛙鳴く小川の前の尾花成春邸御主人が、四十人の合唱による転落を自宅個展と銘打って試みたのだ。

『ウチがたんこんの。なにんナカ展覧会ばスルケンノ』という、九州では京都ベンに比較される優しい筑後ベンで、適当に問のびした言葉を彼の口から直接聴いた、われわれは、それが大変な転落の詩の一步とは知らず、ピクニックへ行く思いで真赤な毛糸のシャツや、カウボーイ姿で乗り込んで行った。

大きい白壁の彼の大邸宅の前身はお米の倉庫だったのだが、歴史は古く、七百三十六年前のものだという。中はヒヤリと冷たい。有名人だけあって、酒はつぎから、つぎと出る。価格の面では安いのが一升ビン入りウイスキー、日本酒の二級酒、一本だけだがブランデーもあるにはあった。まず二階で、来客同士の酒宴が始まった。少々アルコールが頭に回り、それまで不機嫌だったオチ大先生が名論をブチまける頃、ニューアフリカ・オクチ・ビルから元九州派のハヤトモ、ナリタ氏にお願いして持って来てもらった、ニュー・ミチヤ氏の言葉が、最初は重々しく、最後は電子言語まではいって、訳を受け持った私自身、どう訳していいのか困った。それが終わる頃、大体の出席予定者がそろった。

九州派(全メンバー十四名) 十二名。久留米のお役所から三名、隣りのお嬢さんという女性が五、六人来た。尾花氏のファンに相当するような人が二十人の計四十人のおでましだ。ツンとしたレデイや美貌と若さの僕にはほほえむニヤニヤ娘がいるのは田舎も都会も変わらないサロン風景だ。一寸知識のある奴が『きみ!これウイスキーといってネ、キミ蒸留水の、キミ!一種だよ』といった具合に ムリにムリした知識で威張ろうとし、金を持った奴は、ビター一文出しもせぬのに、自動車をみせびらかして田舎娘の胸をときめかす。そんな時「とげん、雨の降る中、ワザワザとげん遠か、浮羽まで、なにしに来たとかいな」と、きわめて形而上学的煽動者が現われて、尾花成春ファンとの間に激しいやりとりがあ

った。ダンディなこのやりとりが娘達の注目をひいたと見るや『君たちの意見も仲々いいよ』と次の取り引き交渉に移る男達ども。

それ迄、なにをして、いたのか、いなかった主人、尾花成春氏が 現われてきて!これから会場ばみてくれんの』と、われわれを階下の応接室に案内した。

『アンタ達が、暴れると思うたけんの、こげん風に床板ばしたったい』という。床は小学校の講堂のように立派で頑丈だ。室は縦が二メートル、横六メートル、奥が一段と高くなって寝室になっている。応接室に寝室とは、一寸異様だが、そこが舞台をも兼ねたとにかく説明しようがないが、特に一段高い、その寝室のベットに坐って、来客を見下ろすのは悪いものではなく、次には拍手が欲しくなって、馬鹿な歌でも、うたってみたくなるから妙だ。

久留米市で電話交換局に出ているという娘さんが、私が真赤なシャツを着ているので大芸術家と思ったのか「先生、これ一体、なんですか」と、階上で、相当、馬鹿気た話を聞かされ、覚悟はしていたものの、真っ黒い寝台だけの、この風景には、いささか驚いて、わざわざ、遠路はるばるやって来たのにといい純情な顔色だ。そういう、抗議的な質問の好きな私は、すぐ、筑後川の梅雨季の流れの ようにトウトウと答えようかと思ったが「私がアナタを呼んだのではありません。尾花さんに質問せんですか」といったら、ダメってしまった。すかさず「遠慮はいらんばい」といって、大声で「この人が一体、こりゃ、なんじゃろうかいといいよらっしゃるばい、アタキも、こりゃなんじゃろうかいと思っておりますたい。いっちょう尾花先生説明してくだはれ」と叫んだ。

「アンタが見た通りたい」「じゃこの寝台の意味は?」「そりゃ、ただの寝台で、寝室じゃけん、寝台ば、置いとりますたい」「これでも展覧会なのですか」「九州派じゃ、いままでの展覧会ば発展的に否定すると、だれかが、いうだけん、否定しましたタイ」「単純 じゃなあ」「単純で、いかんですか?」

擁護派らしき態度で、彼の古い画友が弁じ始めた。

「私は彼とは古いつき合いです、実をいうと近頃、とくにこの四・五年彼についてゆけません。しかし、この室の中にはいると一種異様な気分になることは確かです。この寝台の角から入口の角に至る線のキビシさは、かつての彼の絵にもあったものです。この線の意味を強めるため狭い方の壁に真黒に輝いたハイヒールが、ただ一個、よく見つめなければ判らないように吊り下がっています。つまり、彼の本心はそのハイヒールにあるのであります。」—ここで拍手が沸き、それに気をよくして、ひときわ大きな声で語ろうと

したとき「オイシヤンは、よかことばいいよる。ヨカことは、そげんしゃべったらいかん。悪かこといわんけん、このぐらいにしとかんの」というヤジに彼は引き下がった。

突如誰かが『こりゃ、芸術たい』と叫んだ。「ばかもんよしとけ」「四百五十円の旅費に値いしない代物だ」「なんで、そんならお前は来たのだ」「だまされた」「だまされたなど、大変な賞賛の言葉を簡単にいうな」「なんでだい」「所詮、芸術とはダマスことじゃないか」「ペタンチックなことをぬかすな」「この黒づくめの室の空気は確かに異様ですね」「よくみればオブゼらしきものが総計五個ありますネ」「どこですか」「アノーハイヒールと長い棒、性遊戯器みたいな奴、機関誌、浮標」「それも、どうして、アスファルトをぶっかけ真黒に塗りつぶしたのでしょうか」「意味性の拒絶ですかなあ」「アンタ、東京の批評家みたいなヨカコトば、いわっしゃるなあ」「いうなれば、アンタまで含めて、馬鹿たい」「いらっしゃい」「いらっしゃい、猿回しにござい」と、米倉徳氏が、空気で操作するゴムの猿を踊らせ始めた。

「アタキは、ツイストがウマカたい。ツイスト大会で優勝したけん、こげな勲章ば貰たとたい」「リンボはドウナ」「リンボもうまかたい」「リンボなら、こん人がうまかといいいよるばい」「そげなこつはなか」「そげなこつがあると思とるとが素人の浅はかき、たい」

一ヒモ、イヤ棒だとの叫びで早速リンボ大会が始まった。無精ヒゲのマバラに生え始めた郵便配達の、若い男の、ソリクリカエリの角度の大きさ、足の開きかげんのクスグリは感動を呼び、一挙に、集団の異様な雰囲気シンボルと化した。

酒をのんだら酔いたいという、キワメで……と、リンボに始まるツイストに加え、日本的風土に従い、ソロソロ座を乱すのが、礼節の時刻となった。

スペテの観客が絵だちで、ナニヤラを叫び手を振り、手を握り踊りらしからぬ身振りを始めた。初心者も、どうしても足が鈍く、固い。それだけ抵抗的線が強い、それをムリに動かすと、線がアピールして、相当の娘でも、酔もさることながら、上品に見え、美の女神らしくなるところをスカサズ、ほめ上げ自信を持たせ、現代絵画は自信だと説く。

酸素が不足してスペテの金魚が水面に向かってパクパクやるよう、ワメキ散らしている中にも、議論が習性となってしまった九州派の連中は「この感動!最高ネ」「ウーンフン」「バカだとは思っても悪くない」「ドウしてそんな見方しか出来ねえのかなあ」「オレを含めて、この連中の、このままの状態をボンドで、そのまま固めたら、一寸いいだろうな」「その場合、オレだけは絶対にイヤだよ」「イヤダといった場合、テメエは殺ら

れるだろうな」「そんなこと 知っちゃいねえよ……」

黒い顔色の誠実そうな女の人が「尾花さんが呼んでいます」とオレに告げた。女の人に連れられて地下室へ行く。この騒ぎをヨソに、いつぬけだしたのか、尾花氏は、ホトンド酒の匂いもしない（勿論、オレは飲んでいるので判りはしないが）ドギツイ色眼鏡をはめている。「なんや、エライ早業じゃないか」「ウーン」「なんや」「はじめるばい、アンタが一番酔つとらんごたるけん、助手になれ」「なんの助手や、子分になるとはいやばい。五分五分ではイカントノ」「ヨカコツダケン、今日は、オドンに任かしとかんの」「ヨカタイ」

彼が次の室に連れ込んだ。なんという手の込んだやりかただろう。技師だといえばそれ迄だが、彼は現代には珍しいヒマ人なのだろう。連中が踊り狂っている床板を、アパートなどによくある、こちら側からは見えて、相手の方からは見えない装置を、もっと巧妙にした 奴だ。下から上を覗く。それだけでは満足せず、拡大装置が付いている。それを屈折させて水平に写すようになっている。汚い足のモンがウズ巻いている。水虫がヒドイ。そしてよごれパンツ……など、など。

さっきの女が車の付いた箱を奥の室からコロがして来た。オレは嫌だったが、オゴソカに彼が、この箱の中に寝れというので、ヤムなくはいると、色々の線を、センタク・バサミみたいな奴でつないで屈進自在器みたいな装置で連中がいる床下へピッタリと吸い付けた。

なんのことはない、部分的に導入された色、形、臭いが、尾花成春の好みによって総合されるのである。彼等のザワメキはそのまま、電流となってオレの脳神経を刺激して、集団としての芸術をイヤ応なく、マイラセル。オレが世評、キワメテ、ゲテモの好みの評が高いので（事実は俗物で気の小さいことを誇りにしているのだが）世評に忠実に、特にアル種の匂いをシンボライズして箱の中のオレを興奮させ、御丁寧に、イカれているオレを眺めてニヤニヤしている 尾花自身の像と悪意を反射鏡で送って来る。「眼のクラヤム光り」「オレの体の何十倍もある足の大ユビ』『タバコの吸いガラの熱でオレは焼けただれてしまう』『心臓に直接電流でつたわるつぶやきの大音響』『アバレテクレルナ、君達の足音だけでオレは死にそうだ』オレはいつしか気が遠くなって、意識が回復して飲まれた水が、なんとオレから流れ出た汗を御丁寧に集め、それを電気で環流して蒸溜水にしたのだと聞いた時、オレはびっくりした。

「ドゥヤ!あんとオレが議論した反外面宣言序論という効果たい」との間のびした彼の声を聞いて、古臭い言葉だが、ごく自然に魂を売った悲しみが、突然、胸にコミ上げ、ま

たも涙グムのだった。

機械に弱いオレが助手になって説明してもムダだから、オブゼに仕込んだ装置など、詳しくは尾花氏に聞かれるとして、何故に魂を売ったかという反外面宣言序論の中心からなるべく離れた話をしよう。